

エコアイランド宮古島の5つのゴール



～ 千年先の、未来へ。～  
エコアイランド宮古島の5つのゴール

固有種の保全 (外来種対策)

2030 伊良部+宮古北部  
クジャク個体群根絶  
2050 市全域  
クジャク個体群根絶



指標①  
地下水水質  
窒素濃度

地下水水質・窒素濃度  
(水道水源地)

2016 (現状) 5.05mg/L  
2030 4.64mg/L  
2050 2.17mg/L

指標⑤  
固有種の  
保全

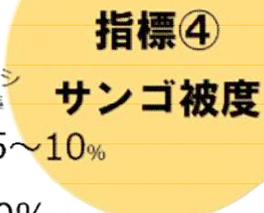
指標②  
家庭系ごみ  
排出量

1人1日あたり  
家庭系ごみ排出量

2016 (現状) 542g/人・日  
2030 488g/人・日  
2050 434g/人・日

サンゴ被度

ハマサンゴ 優占群集 ミドリイシ 優占群集  
2016 20~30% 5~10%  
2030 40%以上 70%以上  
2050



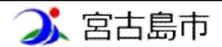
指標④  
サンゴ被度

指標③  
エネルギー  
自給率

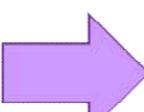
エネルギー自給率

2016 (現状) 2.9%  
2030 22.1%  
2050 48.9%

5つのゴール 各指標の数値の求め方



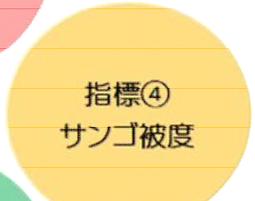
●国が定めた水道水の検査方法に基づき、市での検査を月に一回、厚生労働大臣登録水質検査機関への委託検査を年に一回行い、その平均値より算出しています。



●グリーンセンターに搬入された家庭ごみの総量を、人口と日数で割って算出しています。



●本市で消費されたエネルギーの総量のうち、再生可能エネルギーの消費量の割合から算出しています。(単位:GJ)

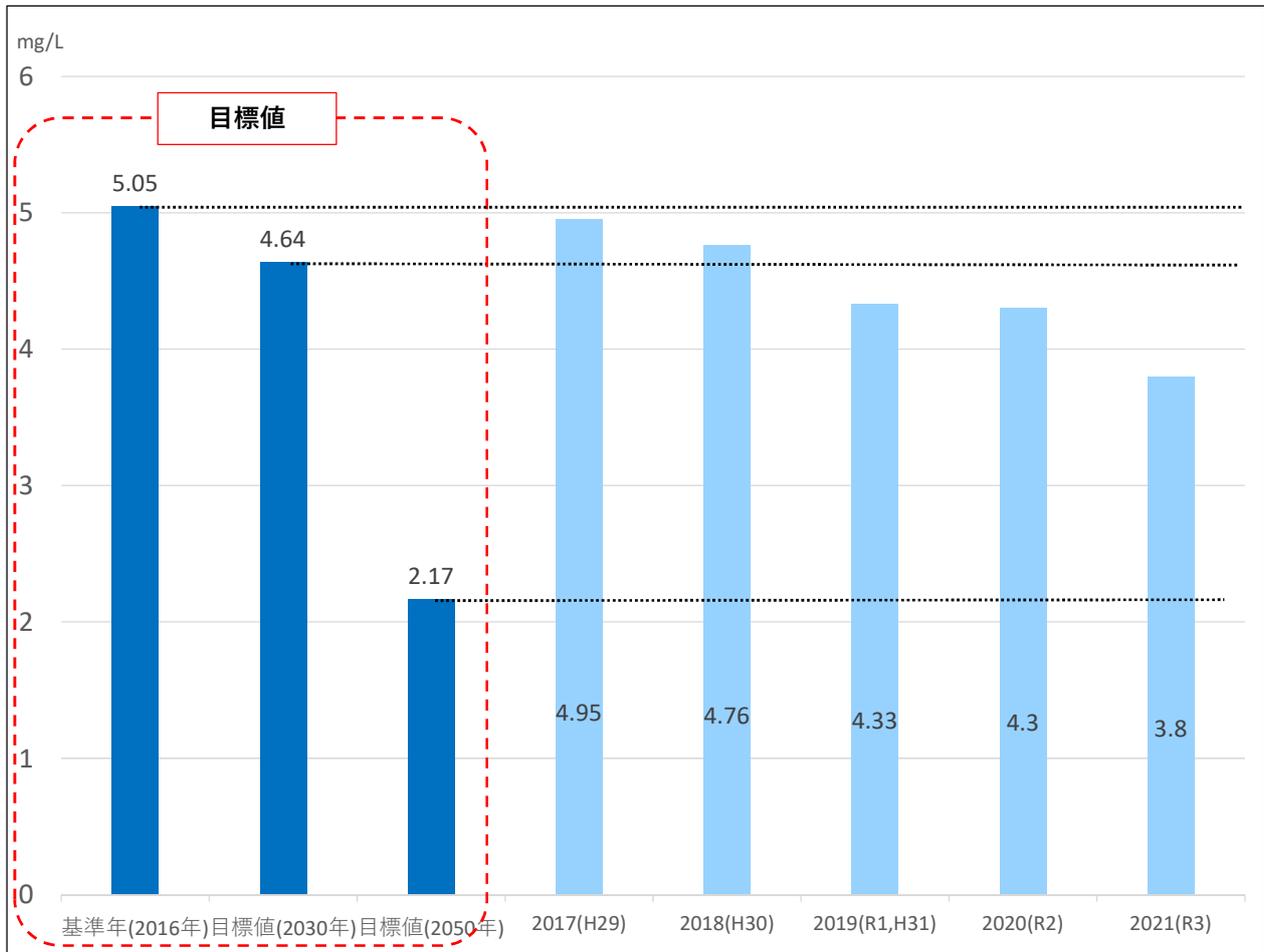


●環境省のモニタリングサイト1000事業におけるサンゴ礁調査方法(スポットチェック法)の調査マニュアルにしたがって算出しています。



●専門事業者に委託して、生存個体数の算出を行っています。方法としては、ねぐら調査や空撮、聞き込み、専門犬の導入、糞の確認等、様々な方法で行います。

指標①地下水水質窒素濃度



分析・評価

令和3年度目標達成率	2030年	304.88%	2050年	43.40%
------------	-------	---------	-------	--------

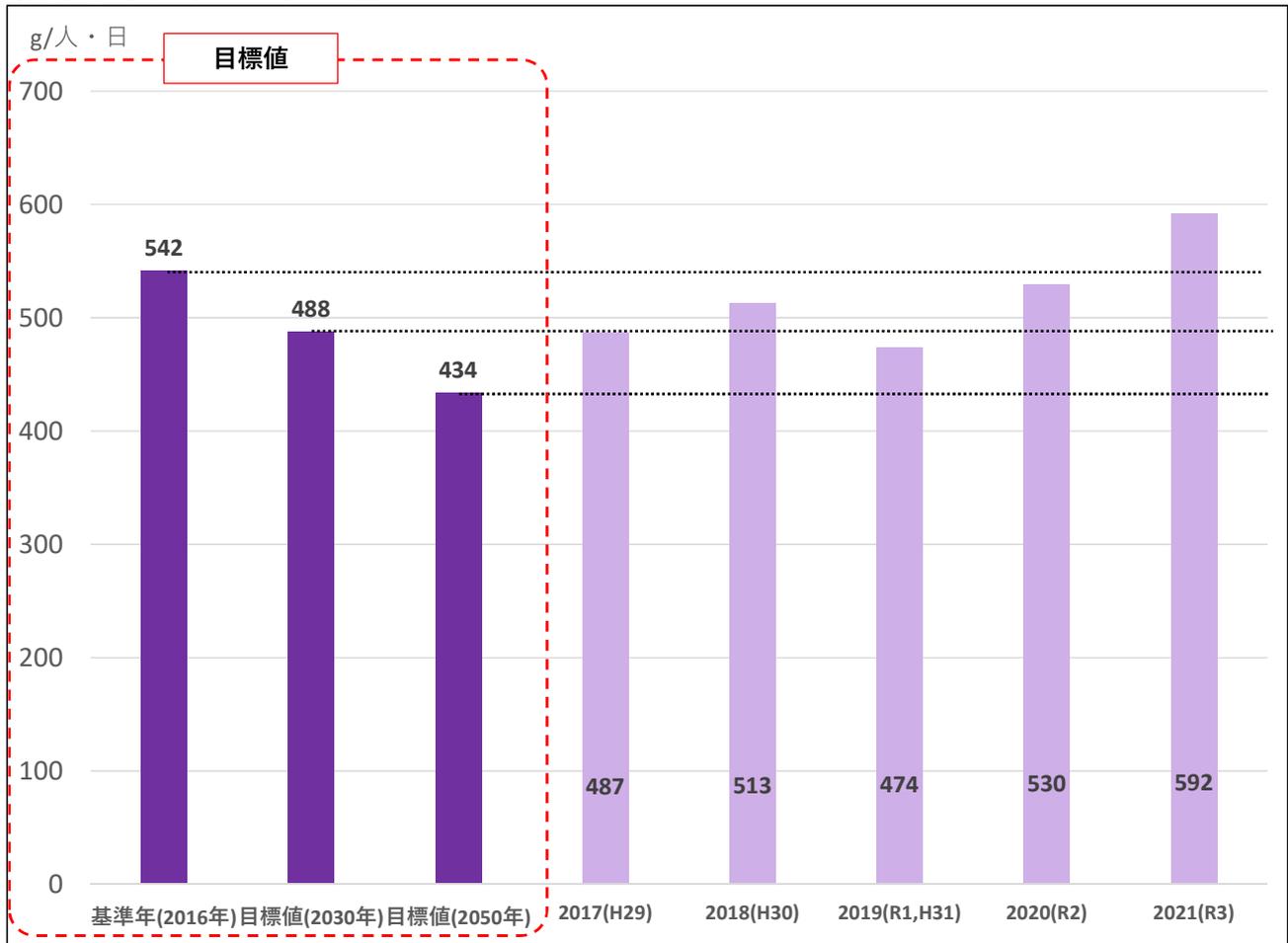
・水源地の保全のために、特定地域を水道水源保全地域として条例で指定したことが、大きな要因と考えられる。これにより、保全地域内で地下水汚染の可能性が考えられる新規建築物等を規制することができるようになったため、水源地への汚染が軽減されてきていると思われる。（水道総務課）

○水道水源地以外の数値について

・徐々に窒素濃度は低下している。最大の要因として、施肥の適正化（時期、量、有機肥料・緩効性肥料の普及）の推進が大きく、農家の理解も進んでいるものと考察される。令和3年度の実績値においては、市街地での窒素濃度減に頭打ち傾向が見られる。（環境保全課・農政課）

・伊良部島は、不透水層が海面以下に分布しているため地下水は「淡水レンズ」の形で島の地下に存在している。その淡水レンズのへりに当たり、現在採水している地点では窒素濃度が高い状態となっていると考えられる。（環境保全課）

指標②家庭系ごみ排出量



分析・評価

令和3年度目標達成率

2030年

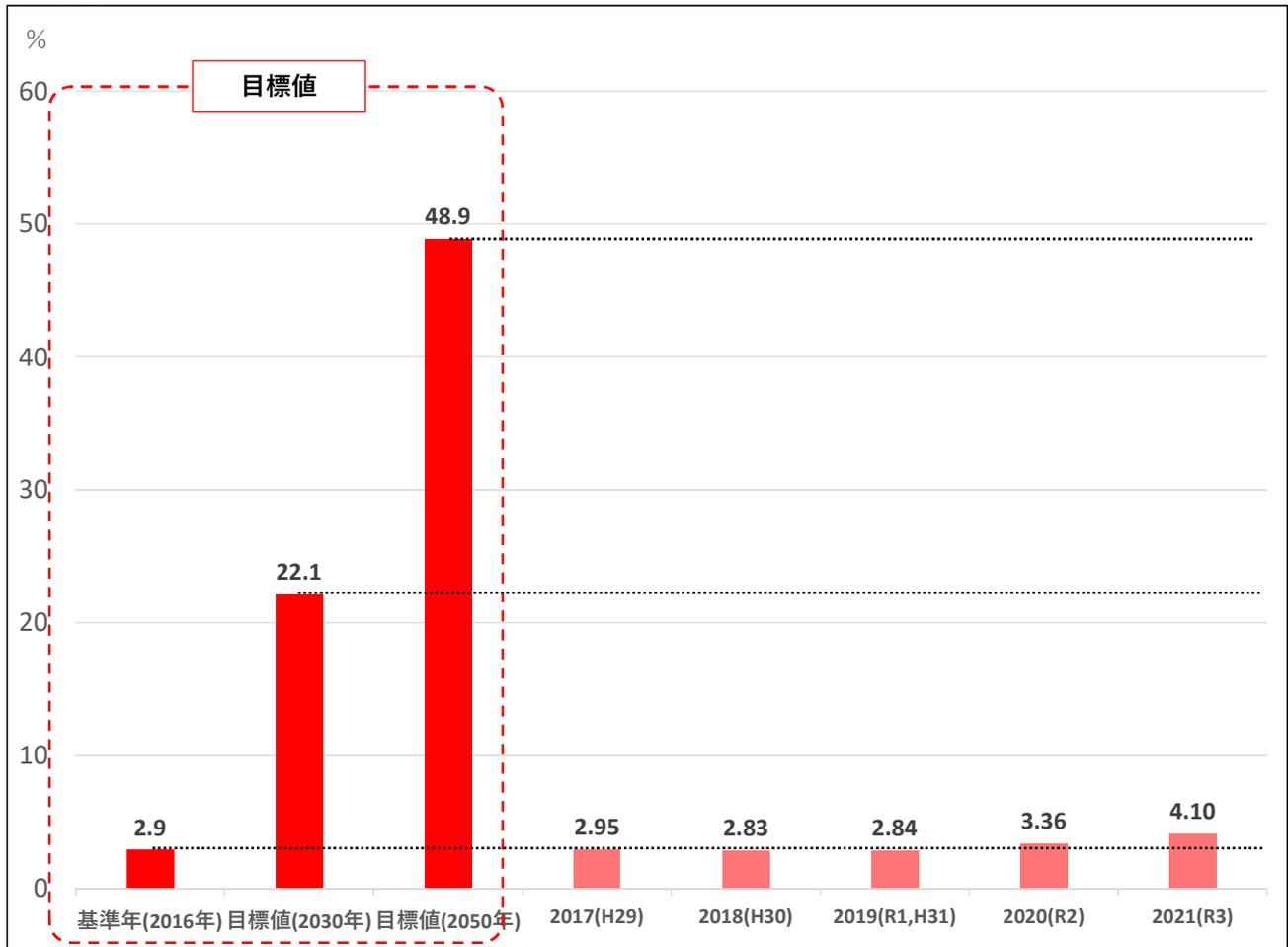
-92.59%

2050年

-46.30%

- ・人口の減少が予測され、それに伴い排出量が減少すると予測されていたが、人口は減少せず、人口、世帯数ともに増加しており、排出量の減少に影響があると考えられる。(環境保全課)
- ・2021年の実績値が減らない理由としては、人口が増えてきていることに加え、コロナ禍で家庭にいる時間が増えたことも影響している可能性はある。更なるごみ減量化の取り組みへの意識の向上を図る必要がある。(衛生施設課)

指標③エネルギー自給率



分析・評価

令和3年度目標達成率

2030年

6.25%

2050年

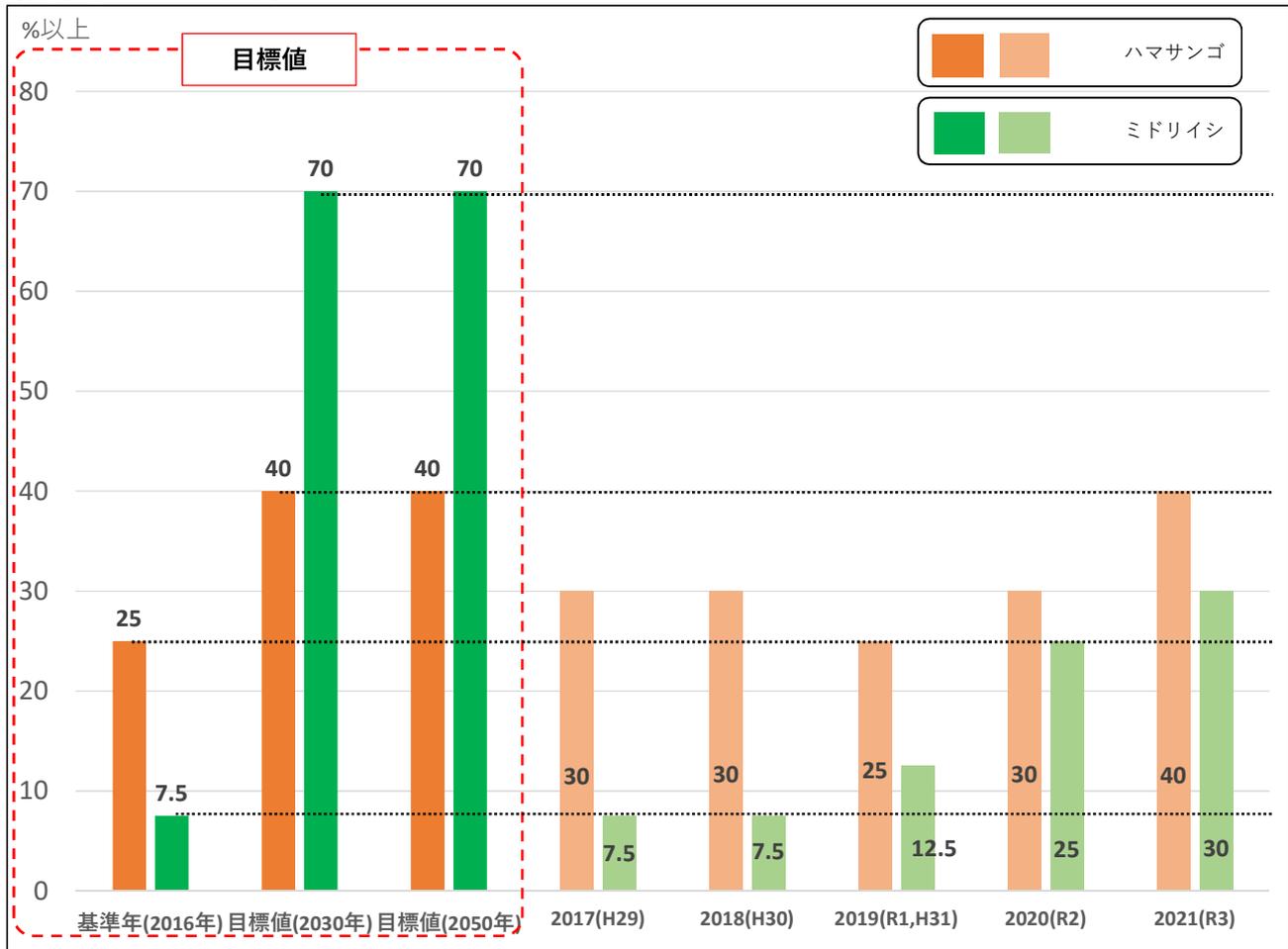
2.61%

- ・エネルギー自給率は増加しており、再エネの普及が進んでいると思われる。
- ・コロナウイルスの影響により、観光客の減少や飲食店の営業自粛に伴う、交通や飲食、観光で使用される石油エネルギーが少なかった。
- ・再生可能エネルギーは、太陽光発電を中心として、増加傾向である。

	2016	2018	2019	2020	2021		2016	2018	2019	2020	2021
再エネ(電力)(%)	-	-	-	-	-	CO2排出量 (万t-CO2)	33.3	34.0	35.8	31.2	30.3
再エネ(燃料)(%)	-	-	-	-	-	CO2削減率 (%)					
EV(台)	163	197	198	208	209	再エネ電力比率 (%)	12	13.9	15.6	16.3	17.3
太陽光(MW)	22	22	25	27	30	エネルギー自給率(%)	2.88	2.83	2.84	3.36	4.10
風力(MW)	4.8	4.8	4.2	3.6	3.6						

- ・CO2排出量については、減少傾向ではあるものの、自動車のEV転換の推進等、CO2排出量の削減に向けて更なる取り組みを検討する。(エコアイランド推進課)

指標④サンゴ被度



分析・評価

令和3年度目標達成率ハマサンゴ	2030	100%	2050	100.00%
令和3年度目標達成率ミドリイシ	2030	36%	2050	36.00%

【ハマサンゴ優占群集の分析・評価】

・カヤツファでは、パラオハマサンゴに2019年から確認されていたホワイトシンドロームが終息したことに加え、被覆状コモンサンゴやスリバチサンゴ類などが増加したことで、サンゴ被度が上昇した。また、吉野海岸においても枝状コモンサンゴが増加傾向にあり、サンゴ被度の上昇が確認されている。

【ミドリイシ優占群集の分析・評価】

・八重干瀬（カナマラ）では、2018年にミドリイシ類のまとまった新規加入が確認されたことに加えて、スゲミドリイシの破片が再固着して群体数を増やしており、これらの成長が2019年から続くサンゴ被度の上昇に寄与しているものと思われる。来間島沖では被度の上昇は検出されず、依然としてハナヤサイサンゴ類の被度が最も高いものの、群体数ではミドリイシ類が最も多かった。この優占サイズは15cm程と小型だが、局所的には最大で10群体/m<sup>2</sup>ほど確認されたことから、今後は緩やかなサンゴ被度の回復が見込まれる。（水産課）

指標⑤固有種の保全

現状

- ・宮古島では、ねぐらとなる森林にそって広域に分布し、飽和状態であったが、3年連続で500羽以上捕獲している影響もあり、捕獲が困難になりつつある。
- ・朝・夕、近隣の畑や草地にエサを求めて現れる。雑食性で草の芽・葉・実、昆虫、爬虫類等を捕食し、繁殖力も強く天敵もほとんどいないため、この数年でよく見かけるようになった。警戒心が強く、遠くからでも人と分かるとすぐに森に入ってしまうため、捕獲には技術と経験が必要。
- ・令和3年度の実績は、成体561羽、雛3羽捕獲、営巣卵90個採取。
- ・伊良部牧山地区においての生息数は、令和元年13.2羽、令和2年11.7羽、令和3年9.4羽程度と推定される。

分析・評価

令和3年度捕獲数

564羽

- ・捕獲方法の多角化や先端技術（ICTやドローン）の導入、専門業者（クジャク探索犬による営巣卵採取、ねぐら調査）による捕獲、わな（箱わな、囲いわな）による捕獲と人材（団体）の育成、群（集団）ごと捕獲できる手法の開発がポイント。（環境保全課）